

2020 Vol.16

GLOCAL



Forum

- 人間とチンパンジーの笑顔は何かちがう? —— 川上文人
- アフリカ地方バムン王国の民族儀礼
—生活地平・民族・国家・地球規模交流を生き抜く— 和崎春日

Notes

- 戦国時代における騎馬戦闘について
—騎乗戦闘の再検討— 杉山浩規
- 二字漢語をめぐる問題点 張璐
- 言語学習環境が留学後の言語維持に与える影響
マーティネリ・アダム

News & Record

- 第10回「院生の力」を開催
- 第12回教員研究会を開催
- 講演会「無形文化遺産と地域づくり」を開催
- The Smithsonian Cultural Rescue Initiative

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院国際人間学研究科の活動レポート、Glocal Vol.16 をお届けいたします。

本研究科は、1991年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998年に創設された人文学部を基礎とする2専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が2004年に合流し、名称も「国際人間学研究科」に変更されました。さらに2008年には歴史学・地理学専攻が加わり、4専攻体制となって現在に至っています。

グローバル化という言葉が当たり前のように口にされるようになった現在、私たちは社会のどのような領域で仕事をするにしても、国際的な視野をもって自分の果たすべき役割を考えずにはいられません。たとえば、2015年9月の国際連合サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）は、国家の枠を越えた人類社会共通の目標として広く共有されています。

ただしここで「国際的な視野」というのは、ただ国外に目を向けるということではなく、同時に国内にも目を向けることを意味しています。というのも、これからの時代は以前にも増して色々な国々の人々が日本にやってきて、共に仕事をしたり日常生活を送ったりするようになることが確実だからです。グローバル化というのは、このように日本社会それ自体が国際的な「場」として開かれていく過程なのであり、その意味で自分が暮らす地域への関心はますます重要になるにちがひありません。本研究科はそうした認識に基づいて、グローバルな視点とローカルな視点の両者を軸とする「グローカル」な教育研究を理念として掲げています。

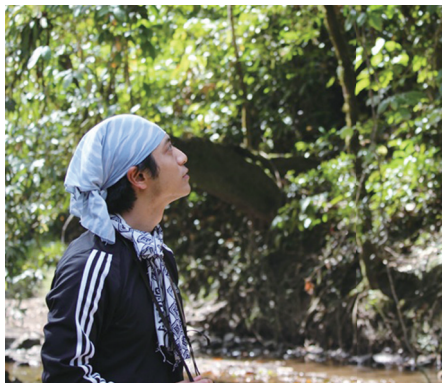
本誌には、多様な専門分野で幅広く活躍する教員の研究報告2編と、それぞれのフィールドで着実に研究を進めている院生3名の研究報告3編、及びスミソニアン文化財レスキューイニシアティブ（SCRI）と国際人間学研究所講演会報告が収められています。いずれも短い文章ながら力のこもった内容であり、まさに本研究科が標榜する「グローカル」な視野に基づいた研究の一端をうかがわせるものであると言えるでしょう。

このように教員と院生が同じ誌面で相互の研究内容を共有する機会はきわめて貴重なものであり、研究科としてもますます本誌の充実を図って参りたいと思います。どうぞ今後ともよろしくご指導・ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

2020年1月30日

石井 洋二郎（中部大学大学院国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 講師

川上 文人 (KAWAKAMI Fumito)

東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻博士課程修了。博士(学術)。専門は発達心理学、比較認知発達科学。ヒト、チンパンジー、ニホンザルを対象に、主に笑顔の進化と発達について研究をおこなっている。近著に『対人関係の発達心理学 子どもたちの世界に近づく、とらえる』(2019年、新曜社、共著)がある。



人間とチンパンジーの笑顔は何がちがう？



そもそも笑顔とは何か

苦笑い、ごまかし笑い、嘲笑など、日本語には笑顔についてさまざまな表現がある。笑顔というと多くの場合、よろこびを代表とするポジティブな感情を思い浮かべるが、上記の表現はどちらかといえば、ネガティブな感情が生じうる場面と結びつくものといえるだろう。そのため笑顔とは何かを考える場合、「〇〇のような場面でみられる表情」というように場面や状況から定義しようとする、あまりにも広く不明瞭なものとなってしまう。対策は単純である。笑顔を「唇の端が上がること」と、形状から定義してしまうことである。なお、本稿では笑顔、微笑、ほほ笑み、笑いといったことばを区別なくもちいることとする。

人間はどのようなときに笑顔を見せるのだろうか。そこには他の動物との違いがあるのだろうか。笑顔から人間の對他者関係における知性を探るため、保育園や動物園で観察をおこなっている。まずは人間の笑顔が成長にとまない、どのように変化するのかみていこう。

人間の胎児は笑う

人間が最初に笑うのはいつなのだろうか。生まれた直後、または生後1か月してからだろうか。実は生まれる前から胎内で笑っている(図1参照)。産科における4次元超音波診断装置をもちいた観察で、人間は胎児期から笑顔を見せることが明らかとなった。胎児はなぜ笑うのか。どのような感情状態なの

か。現状ではどちらの問いにも答えることはできない。



図1. 在胎162日目の胎児の笑顔 (Kawakami & Yanaiharu, 2012)

人間の乳児は寝ながら笑う

では人間が生まれてから、最初に笑うのはいつ、どのような場面なのだろうか。「母親とみつめ合っているとき」ではない。生まれてから最初に笑顔が多くみられるのは、睡眠中である。寝ているときに、とくに何も刺激が与えられていない状態で、不意に唇の端が



図2. 新生児の自発的微笑(川上, 2019)

上がる(図2参照)。この現象は「自発的微笑」と呼ばれている。

視聴触覚的刺激によらず生じるため、「自発的」とされる。同じものが「新生児微笑」とも呼ばれているが、正確な表現とはいえない。新生児期とは生後1か月までのことを指すが、この笑顔は、生後3か月を過ぎても、半年を過ぎても、さらに1歳を過ぎてもみられる。「1歳児が新生児微笑をみせる」という表現には矛盾がある。

人間の笑顔は2歳ごろから多様に

人間が覚醒中に笑顔を見せるのはいつなのだろうか。生後1か月以内にも、笑顔がみられる場合があるが、笑顔が頻繁にみられるようになるのは、生後2、3か月からといわれている。多くの場合、乳児が他者とみつめ合ったり、声をかけられたり、触れられるといった對他者関係においてに生じるため、「社会的微笑」と呼ばれている。

乳児期はよろこんでいるであろう場面でのみ笑顔がみられるが、冒頭に述べたように、私たちはさまざまな場面で笑顔を見せる。そのように笑顔が多様な場面でみられるようになるのはいつごろなのだろうか。保育園の自由時間を観察してみると、何かを失敗した状況や、怒られた状況といった、客観的にみてポジティブとはいえない状況における笑顔が、2歳で増加してくることがわかった。同じように、周囲の他者とタイミングを前後して笑う、笑顔の共有も増えてくる。2歳ごろは言語を獲得し、他者とかがわることが多く

なる時期である。その時期に、ポジティブな感情の表れとしてもちいられることの多い笑顔という表情を、さまざまな場面で「使う」ようになる。笑顔で本来の感情を隠し、状況を平穩に保とう、ポジティブな方向に変化させようとするのが、この時期からはじまるのかもしれない。

日本人の子どもは成功でも失敗でも同じように笑う

日本人がネガティブと思える状況で笑顔をみせることが、欧米人を困惑させることがあるという。さまざまな場面で笑顔をみせるのは日本人だけなのだろうか。4、5歳の日本人とアメリカ人の幼児を対象に実験場面で観察をおこなった。彼らには実験者の前で簡単な課題に取り組んでもらった。申し訳ないのだがその課題はあらかじめ成功したり失敗したりするように仕組まれており、そのときの反応をみるというものであった。その結果、アメリカ人は失敗状況よりも成功状況でより多く、長く笑顔をみせたのに対し、日本人は状況間で笑顔に差がみられなかった。日本人の子どもは成功しても失敗しても、同じように笑顔をみせたということになる。アメリカ人の子どもは自分の感情を素直に笑顔で示したのに対し、日本人の子どもは実験者との関係を平穩に保つために笑顔を使い、状況によって感情を出しすぎないようにしたと考えることができる。

人間のことをより深く知るためにチンパンジーに学ぶ

このように笑顔をみるだけでも感情表出にかなする日本人の特徴がわかる。日本人の笑顔の特徴を知るためには、日本人の笑顔だけをみていてもわからず、他の文化と比較する必要がある。同じように人間の笑顔の特徴を知るためには、他の動物と比較する必要がある。それには人間に一番近い動物である、チンパンジーと比較するのが、最も人間の特徴を浮き彫りにしやすい。チンパンジーの笑顔を観察してみよう。

チンパンジーの乳児も寝ながら笑う

そもそもチンパンジーは笑うのだろうか。チンパンジーの笑顔については、進化論のチャールズ・ダーウィンが記述している。彼らもよく笑うのだが形は人間と少し違い、口角を上げるというよりも、口を丸く開けて笑う（図3参照）。

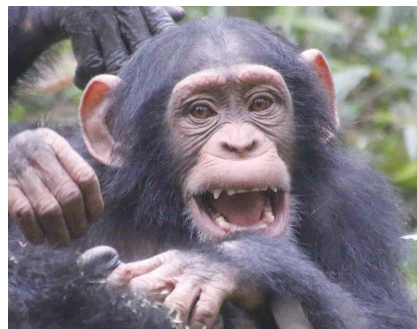


図3. ギニアの野生チンパンジーの笑顔（ファンワ6歳）

チンパンジーの胎児の表情研究は残念ながら存在しない。生後、人間の最初の笑顔は睡眠中の自発的微笑であった。この自発的微笑は、チンパンジーにもみられる。Mizuno, Takeshita, & Matsuzawa (2006) は3個体のチンパンジーの新生児を観察し、生後2か月まで自発的微笑がみられることを示した。彼らは社会的微笑についても報告しており、生後1か月半以降に増加してくるといふ。

チンパンジーは笑う場面が限られている

チンパンジーも自発的微笑をみせ、社会的微笑が生後2か月前後からみられるという流れは人間と同じようだ。では、その後の笑顔はどうなのだろうか。チンパンジーもさまざまな場面で笑顔をみせるのだろうか。高知県立のいち動物公園、日本モンキーセンター、名古屋市東山動植物園で観察をおこなっている。本稿では途中経過を報告したい。

合計400時間以上、ビデオ撮影をおこなっているが、今のところチンパンジーが笑顔をみせる場面は遊び場面に限られている。そのなかには母親が子どもを「高い高い」した場面が含まれている。興味深いのは、その際に笑顔をみせたのは子どもだけだったことであ

る。人間でも同じ場面を観察したが、その場合、高い高いをする母親やおとなの方がむしろ多く笑顔をみせた。これらのことに代表されるようにチンパンジーの場合、笑顔がみられる場面は限られており、おそらく自分が楽しいと感じているときにしか笑わないようである。

人間ほど笑う動物はいない

人間はお腹の中から笑いはじめ、睡眠中の自発的微笑、覚醒中の社会的微笑から、多様な場面での笑顔へと発達させていく。チンパンジーにも自発的微笑がみられ、2か月前後で社会的微笑が増加してくるといふ初期発達は類似している。人間の笑顔に特徴がみられ出すのはその後である。人間は何か失敗をしても、他者に怒られても、場合によっては悲しいときにも笑顔をみせる。その理由はさまざま、個人的な場合もあれば、他者との関係における場合もあるだろう。どちらにしても、人間ほどさまざまな場面で笑顔をみせる動物はいないようだ。

笑顔は他者との関係を平穩に保つ手段としてお手軽である。チンパンジーなど人間以外の霊長類の場合、それをグルーミングによっておこなっている。しかし、グルーミングは1個体が同時に2個体以上に行うことができない。それに対して笑顔は少し唇の端を上げるだけで、笑い声を発するだけで、周囲にポジティブな感情（ではない場合もあるが）を拡げることができる。笑顔は有効な感情の飛び道具といえよう。

参考文献

- Kawakami, F., Kawakami, K., Tomonaga, M., & Takai-Kawakami, K. (2009). Can we observe spontaneous smiles in 1-year-olds? *Infant Behavior & Development*, 32, 416-421.
- Kawakami, F., & Tokosumi, A. (2011). Life in affective reality: Identification and classification of smiling in early childhood. *Proceedings of the 14th International Conference on Human-Computer Interaction, USA, Lecture Notes in Computer Science Volume 6766*, 460-469.
- Kawakami, F., Tomonaga, M., & Suzuki, J. (2017). The first smile: spontaneous smiles in newborn Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *Primates*, 58, 93-101.
- Kawakami, F., & Yanaiharu, T. (2012). Smiles in the fetal period. *Infant Behavior & Development*, 35, 466-471.



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 教授

和崎 春日 (WAZAKI Haruka)

1949年生。慶應義塾大学博士（社会学）。神奈川大学、日本女子大学、名古屋大学各教授を経て、現職。1973年以来、アフリカに約28回訪問し、計7年間のアフリカ生活経験を持つ。特にカメルーンには、6年間、バムン民族の村と町で生活し、日米欧では唯一のバムン語話者であり、バムン語フランス語日本語対応グロッサリーを編纂中。アフリカと日本の都市人類学を専門とする。前日本アフリカ学会副会長。



アフリカ地方バムン王国の民族儀礼

—生活地平・民族・国家・地球規模交流を生き抜く



1 民族集団の維持方法 —民族王権の成立

18～19世紀、アフリカ・カメルーンのアダマワ高地には多くのチーフダム chiefdom 首長領があった。この首長領が他の首長領と接触交流し、時に戦争となり時に協定を結んで、より大きな版図をもち中に多くの旧首長領を抱える大きな首長領統合体ができていった。これがキングダム kingdom 王国である。こうして、今のカメルーン西部州に、バムン王国が誕生した。約200年の歴史がある。第10代ブオンブオ王と第17代ジョエア王は、広い版図を求めて遠征を多くの首長領に仕掛けていった。こうして、現代のバムン王国が成立し、1964年フランス植民地からのカメルーン独立後は、バムン県になっていった。

2 埒外の内在化・周辺を中心化 —被征服民の中心登用、 王子格 Nji タイトルの授与

19世紀の中頃から末、第17代ジョエア王の時代に、王都フンバンから見て南100キロの地にあったマンシャ首長領の民は、金属技術を持っていた。王国に取り込まれて、王都フンバンの中心・王宮のすぐそばジンカ街区、つまり王の直近に居所を与えられる栄誉を得た。金属細工の職人集団は軍事に繋がりがやすく重要視された。さらに、ジンカ職人集団の親族長は、ンジ王子のタイトルを与えられた。それから今日まで2世代くだって、

傍系へ広がり多くの親族成員を抱える大職人グループとなった。そして、各人が親方となって、多くの徒弟を抱えるまでに成長した。

ここで、重要となるのが、親方—徒弟の関係である。親方は、国際販売から国内販売、鑄造技術の弟子指導と3階級に分かれている。ジンカ街区のンジコモ親族集団の中核部が親方の上層を占めている。そして、それぞれの親方に、徒弟がついて習う。この時、徒弟たちは、全員が普通のバムン臣民である。つまり、被征服起源をもつ集団がより上位の階層を占め、征服者側に元々いた「普通の」バムン民衆が、被支配層から支配されるのである。こうして、とかく下層に位置付けられてしまう被征服起源をもつ他民族が、より上位の支配的な役割を担っていく。物理的かつ心理的な平衡が生み出される。差別の超克がある。旧首長領の尊厳が保たれ、そうであるが故に、余計にバムン民族になりきる志向が増す。この集団の長は、王子格のンジ・タイトル保持者に任じられ、王と直接接合が可能の特権的立場についた。つまり、旧被征服首長領の者たちが、王権の中核に位置づけられ、地位の逆転・平準化が起こる。こうした政治デバイスが中に込められるからこそ、王権という集中権力化を根幹としどこか「いびつな」暴力政治装置が生き続けられるのである。

3 王子タイトル叙勲儀礼の 政治性—民族内外に 浸透する「生きる意志」

王子格タイトルのンジ授与儀礼を、王は基

本的に一生に1～2度わが身を賭けて執行できる。バムン民族や王権に貢献を成した者が、血縁者でなくともンジ王子格に任じられる。52名の王子タイトル保持者が誕生した。各人がいかなる理由で王子に成りえたかを王宮前広場の何千人と集まる都市儀礼の場で、公表され栄誉を手にする。イスラーム世界での貢献を理由にンジとなった者は、いない。バムン民族人口の6割をモスLEMが占め、今回新ンジに任じられたモスLEMも多いのに、である。それは何故か。

イスラーム化の伝播過程—調査方法とともに

現在、バムン王は、イスラーム王スルタンである。19世紀末ころサハラを超えて、今のカメルーン北中部まで、イスラームが入ってきた。バムン・イスラームの源泉を調査した。イスラーム教師ムワリム（ウラマー）に、師が誰かを聞く。その師の所に行き、師の師が誰か聞く。すると起源では、バムン大ムワリム全員が他民族ハウサから教示を得ていた。バムン王権は、イスラーム宗教知識を必要とし、他民族ハウサを宗教大臣に今日まで任用し続けている。バムン民族は、他民族によって支えられているのである。バムン王権にとって、イスラーム生活に関しては、宗教権威の階層性からフンバン中央モスクが指示系統の最高位に立つ。この最高権威をさらに指導する地位が、イスラーム王スルタンである。全てのイスラーム生活に、バムン王＝スルタンの権威が届く。したがって、バムン王権が注意を払う必要があるのは、イスラーム以外の事績に対して、である。こうして、

52人の新ンジ顕彰の理由に、イスラーム以外の事項ばかりが登場したのである。

民族性の高揚・バムン性の発揚—エスニシティ称賛

バムン民族の王権中枢に人びとを位置づける、この王子格を生み出す儀礼では、バムン性や民族性が鼓舞され発揚される。民族や王権の発展に貢献した者を、ンジに称える。かつて首長領間で戦争があった時代には、戦いに勲功あった者が、ンジに任命された。今回の新ンジには、バムン伝統舞踊集団の長がいる。バムン伝統王宮建築の専門家がいる。バムン民族伝統医もいる。南部の首都ヤウンデ、最大都市ドアラでのバムン民族工芸の普及に貢献した者も、ンジに任じられた。民族性、伝統性が強調される。女性の王妃のなかで「王子」となった2人の王妃新ンジは、ともにバムン伝統で元タンジとなる双生児である。バムン社会では、双子で生まれた者は、神力の発現として称賛し王の子という栄誉を与える。民衆にバムン民族の伝統慣習の再確認を迫るのである。北部都市ンガウンデレのバムン民族結社の長も、遠隔地での民族文化の継承発展に尽くしたとしてンジになった。バムン、バムンと民族性が称揚される。王は、王権拡張時代の戦いの歌を「バムンは強い」と謳い、家臣たちが続いて民族称賛の大合唱が広場に響いた。ここで顕彰者には、ヤシの枝葉が褒章として与えられた。バムンの地の特産ヤシの森の地所を手にするのである。

現代政治性と資本経済の取り込み—南部大都市との接続

だが、よく見ると、伝統民族性からはずれた現代性の達成者が顕彰されている。カメルーン国首都ヤウンデの省庁で働く局長と事務次官がいる。事務次官という国家の副大臣を「お前もよくやった、バムンの王子にしてやろう」と新ンジに任じた。3等級ンジへの任用者にもカメルーン国家の法務省局長がいる。国家のほうを地方民族が認めていく、という強い逆転の意志が読み取れる。中央行政だけでなく、県レベルの行政での活躍者もいる。バミレケ隣県と高校誘致の政治競争に打ち勝ったバムン県庁役人も、ンジになった。学的資本をバムンに導き入れた功績である。王都フンバン市の市役所結婚課長もンジに任じられた。イスラーム結婚は物入りである。資本がいる。近年、お金のない多くの若者が

行政婚に駆け込む。イスラーム以外の結婚に王権は、目を光らせていなくてはならない。こうして市役所結婚係を「王の子」にしておく必要があった。ここに現代への対応がある。

政治、行政ばかりでなく、現代経済にもリンクが張られる。ヤシの農業経済は、自給的な経済では機能する。だが、大きなお金が巡るわけではない。カメルーンの輸出産物の一つにコーヒーがあるが、バムンとバミレケの地は、良質のカフェ・アラビカの産地で開拓が進んでいる。コーヒー農業経済にキャッチアップしなくてはならない。バムン県コーヒー公社社長がンジに任じられた。その運輸を司るカメルーン国運輸公社フンバン支部長と副支部長も、王子になった。経営者となって、バムンの地と首都とを繋ぐ「フンバン—ヤウンデ」バス交通網の整備者にも、ンジが与えられた。伝統民族領域は、必死に現代経済を取り込もうとしている。現代農業組織であるバムン農業協同組合の理事長も、ンジに任じられた。儀礼の表のメッセージは「よくやった、王子にしてやろう」。背後にある意図は、現代資本フェーズの取り込みである。

4 国家の相対化、民族の相対化—他民族とともに生活をいきる

ンジ儀礼は、バムン民族性の優秀さを謳いあげる。だが、フランス人がバムン王子に任じられている。南部の最大都市ドアラで貿易を営み、バムン・コーヒーを買い付ける貿易商である。王権はこれを逃さない。一方、彼もンジであることが地方文脈で買い付けに有利に働くことを知っている。バムン王の牛を管理するボロロ民族もバムン民族の王子ンジになった。バムン工芸を扱うヤウンデのバミレケ民族の商人も、ンジになり、バムン民族の価値中枢に入りこんだ。多くの他民族がバムン民族の根幹部に入り込み、バムン民族性を支えている。

民族は、国民国家の中をなんとか生きていなくてはならない。資源や経済チャンスが偏在した植民地化状況から独立したが、その植民地が首都となり南部優位の政治経済を支えている。この矛盾を今も抱えるカメルーン国民国家のなかで、資源乏しい地方王権民族のバムンは、必死に国家体制に繋ごうとする。それほどに、国家は民族に矛盾を強いて

いる。その意味で、国民国家が絶対などではなく、民族の生きづらさから国家は相対化されなくてはならない。また同時に、集中的な権力装置・王権が絶対的でないように、民族もまた、絶対的でありえない。民衆が生きている現実から見れば、民族もまた生活によって相対化されなくてはならない。人びとは、生きていくためなら、いくらでも民族を乗り越える。いくらでも固有自己民族の枠を超えて他者民族と結び合う。自他は他自となり混ざり合う。民族もまた、軽々と生成を繰り返すのである。

民族が生き続けられるためには、非民族、他民族、異民族、超民族、民族周辺、両義民族、多民族、媒介民族、民族複合、民族融合、民族内外、民族交流、民族不純化、民族開放、などの変成・混成が必要だということである。民族の枠を超える不純化が起こらないと、民族の純化・発展・発揚は継続しない。資源をもたない地方民族は、国家に頭を下げると言われて下げるのではなく、尊厳は保ち自文化を敬しつつ、裏では自らを削って必死に現代政治と現代経済を呼吸し咀嚼し、今を生き抜こうとしているのである。

振りかえれば、私たちも、いかに自分が他者・異質・新来・周辺・地方・遠方・底辺・異起源・異民族に支えられているかを、窮する時はなおさら、思い知り深く再確認するのである。





Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 1年
杉山 浩規 (SUGIYAMA Hiroki)

1994年、愛知県名古屋市出身。中部大学人文学部歴史地理学科を卒業後、2年間企業に勤務の後、2019年度より大学院入学。専攻は日本中世史。卒業研究では「東海地方における騎馬戦の実態」という題目で戦国時代の騎馬兵の合戦様式を調査したが、東海地方に限定するに留まった。修士論文ではその範囲を全国に広げ、地域性に重点を置き分析を試みる。



戦国時代における騎馬戦闘について

— 騎乗戦闘の再検討 —



はじめに

近年、鈴木真哉氏を初めとした研究者によって、戦国時代の合戦様態に関して騎乗戦闘の有無が議論になったが、その多くが地域性を無視していると感じられる。本論では一次史料や同時代の人物の書き残した覚書を中心に、特に戦闘の際の騎乗の武士がどのような戦法を選択したか、特にそこに地域性の影響が現れているかに着目して分析を行いたい。

また鈴木真哉氏は江戸時代の軍学者が馬上の槍を「犬槍」とした事に触れ、これを「無意味なもの」と解釈しているが、これが妥当であるかについても考察を行った。

史料に見る騎馬戦闘の実態

現在一次史料としては「藤堂藩諸士軍功録」の分析を行っている。これは藤堂藩が大坂夏の陣の後に、配下の武士に命じて上申させたもので、自分が合戦の際にどのような行動をしたかを報告させたものである。この史料では、追撃戦を行う際に騎乗のまま敵に攻撃を仕掛けた例や複数の騎乗の武士が連れ立って突撃を仕掛けた例や、下馬した敵武者と交戦した例、下馬が早く戦いに参加できなかった例などが見受けられた。

また戦国時代の人物の手による記録に関しては、「豊鑑」「三河物語」「伊達日記」において記述を確認できた。「豊鑑」においては

一度撤退してから再度戦場に戻り、そこで騎乗のまま討たれたという記述があり、下馬する事は不可能では無かった様に思える。「三河物語」においては、追撃や移動中の敵を急襲した際に騎乗戦闘が発生しているとの記述がある一方で、筆者の大久保忠教は「合戦之時八、皆々馬より追下して、馬をバ後備より遙かに遠くやる物」ともしており、彼は下馬して戦闘に入るのが基本という認識を持っていた様に窺える。逆に「伊達日記」においては騎乗で戦場を「乗分」たり、乱戦の中馬上の敵を突き落としたりと、前述の史料と違い追撃戦でない騎乗戦闘が記録されている。

これらの史料はそれぞれ竹中重門、大久保忠教、伊達成実といった実際の合戦に従軍した武士が書き遺したとされており、その合戦像において大きな間違いはないと推察される。

また地域性の観点で見ると、藤堂高虎は近江出身で領国は伊賀・伊勢の大名、竹中重門は美濃、大久保忠教は三河の出身であり、伊達成実は陸奥の武将である。挙げた史料の内、東北の記録である「伊達日記」にのみ追撃戦などの移動が関係しない戦闘で騎乗戦闘が記されているのは興味深い。また騎乗・下馬に関して、具体的に命令が行われた記述はなく、何らかの命令や規則があったとは思えない。

現状ではまだ史料が少な過ぎるので、より多数の良質の史料を、特に西日本を中心に収集し分析を行いたい。

軍学書に見る「犬槍」の記述

「犬槍」という記述は、甲州流とその流れを汲む北条流・山鹿流の軍学書に見出す事ができる。それらの軍学書において、「犬槍」は「馬上の槍」と並んで「堀越、垣越、溝越の槍」が挙げられていたり、「犬槍」という語が「捨て首」「女首」と並列に記述されたりしている。その事から、「犬槍」という語は「無意味・非合理的」というよりも「卑怯・不名誉」という意味合いが適切である様に思える。

また甲州流では騎乗戦闘の例に関する記述が見られ、また山鹿流の兵法書では騎馬を用いた戦法についての記述も存在した。一方で十八世紀に薩摩で成立した合伝流では「馬上の駆引思ひもよらざる事なれば、馬上の太刀・鎗、当流にては戦場に用なしとす」としており、この時代に軍学者の間で「騎乗しての戦闘は無意味」という考え方が発生したと言えるだろう。

参考・引用文献

- 鈴木真哉『鉄砲隊と騎馬軍団 真説・長篠合戦』2003 洋泉社
中村勝利編著『藤堂藩・諸士軍功録』1985 三重県郷土資料刊行会
堀保己一編『新校群書類従 第十六巻』1977 名著普及会
大久保彦左衛門『三河物語』1992 徳間書店
石岡久夫『日本兵法全集1.3.4』1967、『日本兵法全集7』1968 新人物往来社



Profile

国際人間学研究所 言語文化専攻 博士前期課程 1年

張 璐 (Lu Zhang)

1995年生まれ。2017年中国の厦門理工學院を卒業。専門は日本語教育学。現在、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、日中同形の二字漢語をめぐる問題点について研究している。

左の写真は中国江蘇省泰興市にて撮影



二字漢語をめぐる問題点



はじめに

筆者は、大学で日本語を専攻していた。中国語母語話者として日本語を学んだ際、母語の中にすでに存在している漢字の知識が学習の妨げになることに気づいた。

特に、日中同形の「二字漢語」を最も間違えやすかった。例えば、「*今の生活は疲れているが、とても充実だ(充実している)」である。日本語では、「充実」は動詞として使われるが、中国語では形容詞として使われる。筆者はそのような「二字漢語」における誤用に興味を持ったため、日中同形の「二字漢語」を研究することにした。

二字漢語における誤用

中国人日本語学習者は日本語で作文を書く際に、母語の影響を受けて、二字漢語を使用する傾向がある。しかし、「二字漢語」の構文を用いる際に、「二字漢語」の品詞性による誤用がよく見られる。

また、品詞性の誤用のほかに、「二字漢語+する」(以下は「二字漢語動詞」とする)の前の格助詞を間違えやすいことも指摘されている。これまでの「二字漢語動詞」に関する先行研究をみると、中国人日本語学習者に「ヲ」格の過剰一般化が起こっていることがわかる(杉本、1997)。

先行研究

先行研究として、李(2012)、付(2011)、杉本(1997)、生田・久保田(1997)を調べた結果、日中同形の二字漢語の品詞性についての研究は少ないことがわかった。そして、「二字漢語動詞」における格助詞の誤用の分析に関する研究はより少ない。李(2012)は日中同形の「二字漢語」の品詞および助詞に関する誤用の原因を分析しているが、主に意味用法の誤用という観点から検討し、格助詞については詳しい研究がない。

付(2011)は「二字漢語」を自動詞、他動詞、形容詞、副詞として使った誤用の四つの種類を検討し、助詞「に」と「で」の取り違いについて述べているが、「に」と「を」の取り違いについて十分に調べられていない。李と付において「二字漢語」の品詞については簡略に触れているのみで、格助詞については研究は不十分である。

杉本と生田・久保田(1997)は中上級の複雑な格助詞の意味機能の理解のみ考察したが、テストの問題として出る二字漢語動詞が検討されていない。そこで、二字漢語の品詞と二字漢語動詞における格助詞を関連付けて、その誤用の原因を分析したい。

研究目的・方法

本研究は上述した先行研究を踏まえ、まず、

学習者の作文コーパスを使って、中国人日本語学習者は「二字漢語」の構文を作文で使う際に、誤用を起こす場面を分析し、習得上の問題点を品詞性と格助詞から検証する。それは中国語の影響とどのようにかかわっているのかについて調査し考察する。また、中国人日本語学習者を対象に、穴埋め式のテストの形でアンケート調査を実施し、格助詞の意味役割ごとに誤用傾向について検討する。この二つの方法によって、それらの誤用がもたらす影響及びそれに対する改善策についても模索する。中国人母語話者に対する具体的な教授法を提案したい。

引用文献

- 生田守・久保田美子(1997)「上級学習者における格助詞『を』『に』『で』習得上の問題点—助詞テストによる横断的研究から—」『日本語国際センター紀要』第7号、pp.17-34
- 杉本妙子(1997)「格助詞『を』をめぐる誤用—分類と分析」『コミュニケーションに学科論集 茨城大学人文学部紀要』第1号、pp.31-50
- 付立民(2011)「日本語学習者の『サ変動詞』の習得に関する研究—中日同形のサ変動詞を中心に—」大連理工大学 外国語言学及び応用言語学研究所 修士論文
- 李惠(2012)「中国人日本語学習者による日本語作文における二字漢語サ変動詞の誤用について」『日本語研究』第32号、pp.117-129



Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 博士前期課程 1年
 マーティネリ・アダム Adam Martinelli

2015年に言語学専攻と日本語副専攻でオハイオ大学を卒業し、JETプログラムに就職し、3年間徳島県鳴門市で小学校と中学校で英語を教えた後、2019年に山田和夫特別奨学生として中部大学大学院に入学した。現在、国際人間学研究科の言語文化専攻の一年生である。



言語学習環境が留学後の言語維持に与える影響



語学留学プログラムは、その目標言語との接触、言語使用の機会、動機付け、環境の変化などにより言語学習や言語習得に多大な影響があることが知られている (Byram and Feng 2006, Freed 1995)。しかし、多くの先行研究はプログラム終了までが対象期間であり、留学参加者が帰国後に再び元の環境に戻ると言語力がどのように変化するかについての研究はほとんど見当たらない。本研究は、留学参加者の帰国後の言語学習の変化とその要因を調査するものである。本報告はその一部である。

被験者は、2019年8月～12月までアメリカのオハイオ大学での「長期海外研修」プログラムに参加した中部大学英語英米文化学科の2年生である。データ収集は主に3つの方法で、3回に分けて実施する。すでに、1回のデータ収集は本年7月末から8月初に行った。2回目は12月と来年1月に行う予定である。3回目は2020年の4月と5月頃に行う。留学の直前、直後、そして再び元の環境に慣れた帰国数が月後の3つのポイントでデータ収集し、被験者の留学中の英語力の伸長と帰国後の言語維持・喪失、その原因について探りたいと考えている。

データ収集方法の1つは質問紙調査である。それはさらに英語学習プロファイルと英語学習環境調査の2つの質問項目群に分かれている。英語学習プロファイルは被験者が日常生活の中でどの程度英語を学習し、英語と接触する機会を設けているかを調査するものである。もう1つの英語学習環境に関するアンケートは、被験者の英語学習と環境に関するものである。特に日米での授業外での英語接触と学習環境に焦点を当てて調査する。

2つ目のデータは、被験者の留学前後のス

ピーキング能力判定テストとして、英検2級用のインタビュー問題の結果を利用する。英検と同じ判定基準で評価すると同時に、録音したスピーキングデータを使用し、流暢さの指標として1分間の単語数 (word per minute: w/m) も計る。

3つ目のデータは日本語によるインタビューで収集する。帰国後の日本における英語との接触や動機づけについて、より深く細かな情報を収集する。対象者は、留学した35名の内の15名である。TOEICのスコアを基準に上位群、中位群、下位群からそれぞれ5名を選出した。

本稿では、35名の出発前のスピーキング力と流暢さの結果、それにそれらの相関について報告したい。これが出発前の英語力の基準となり、今後、彼らが帰国した後の同様の試験結果と、その相関を測る予定である。

まず、英検問題を利用したスピーキングテストでは、30点満点で、最高が24点であり、最低が10点であった。平均すると17点である。意味のない相槌を抜き、1分間の単語数より計算した流暢さは、最大が89.5 w/mであり、最小が17.8 w/mであった。平均すると52 w/mである。

スピーキングテストとTOEICスコアの分布は右の図のようである。その関係は全て正の相関があった。英検とTOEICの相関係数はやや強い0.66であり、英検と流暢さの相関係数もやや強い0.59だが、流暢さとTOEICの相関係数は弱い0.31である。TOEICと流暢さとの相関係数が低いのは予想通りだが、筆者が行った英検利用の面接結果とTOEICのやや強い相関係数が予想外であった。

今後2回目と3回目のデータ収集により、

この相関がどのように変化するか特に注目していきたい。

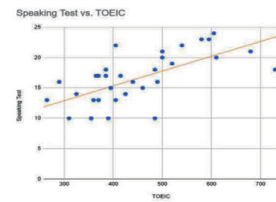


図1 スピーキングとTOEICの相関

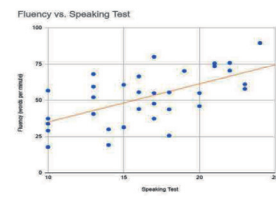


図2 スピーキングと流暢さの相関

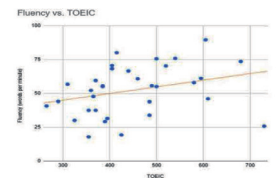


図3 流暢さとTOEICの相関

引用文献

Byram, M., & Feng, A. (2006). Living and studying abroad. Clevedon [England]: Multilingual Matters Ltd.
 Freed, B. (1995). Second language acquisition in a study abroad context. Amsterdam: J. Benjamins.

第10回「院生の力」を開催

第10回「院生の力」研究報告会が2019年11月6日に開催された。

今回は2019年4月に博士前期課程に進学した言語文化専攻2名、歴史学・地理学専攻1名の院生が、学部卒業論文の概要を紹介するとともに、今後の方向性についての展望を語った。いずれも自分の関心対象を真摯に探究していることがうかがえる発表で、これからの研究の進展を大いに期待させる内容であった。発表後には指導教授をはじめ、専攻の異なる何人かの教員からも質問やアドバイスがあり、たいへん盛り多い報告会となった。




CHUBU UNIVERSITY
大学院国際人間学研究科 主催

院生の力

大学院生たちが、一般聴衆向けにわかりやすく研究内容を発表します。どなたでも参加自由ですので、ぜひ聞きにいらしてください。特に学部学生を歓迎します！

日時
2019年11月6日(水)
15:20-16:50

場所
2522講義室

歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年生 杉山 浩規 氏
「戦国時代の騎馬戦闘について—騎乗戦闘の再検討—」

◆

言語学専攻日本語日本文化コース 博士前期課程1年生 張 口 氏
「二字漢語をめぐる問題点—中国人日本語学習者を対象に—」

◆

言語学専攻英語圏言語文化コース 博士前期課程1年生 マーティネリ・アダム氏
「言語学習環境が留学後の言語維持に与える影響」

第12回教員研究会を開催

第12回教員研究会が2020年1月22日に開催された。

今回は、まず心理学専攻の川上文人講師が「人間とチンパンジーの笑顔は何がちがう？」と題するテーマで発表した。「笑う」という行為は人間が胎児の段階から見られるという話や、「高い高い」をして子供をあやしているとき、人間の親は自分も笑っているがチンパンジーの親は笑っていないといった興味深い事例を、動画をまじえた豊富な映像資料とともに示しながら、「笑顔」というキーワードから「人間とは何か」という根源的な問いに迫ろうとする、今後の発展可能性を大いに期待させる発表であった。

次に国際関係学専攻の和崎春日教授が「アフリカ地方バムン民族王権の都市儀礼ーカメルーン国家・国際・資本のなかの資源なき民族の生き抜き戦略ー」というテーマで発表した。長年にわたる豊富な現地滞在経験を踏まえながら、バムン民族王権の政治体制がヤシ油の儀礼を通して形成・継承されていく過程があざやかに示されただけでなく、「国民国家」の枠組みを越えた視点から西欧的価値観を相対化する学問的知見がいたるところにちりばめられた、きわめて内容豊かで刺激的な発表であった。

若手講師とベテラン教授による、分野も方法もまったく異なる対照的な発表であったが、そのこと自体が本研究科の多様性を示すものであり、出席した教員のみならず学生からも活発に質問が出て、充実した研究発表会となった。



中部大学国際人間学研究科 主催

第12回 教員研究会

2020年1月22日（水）

研究科委員会終了後（17:30頃～）

人文学部会議室（25号館2階）

川上 文人 講師

国際人間学研究科 心理学専攻

「人間とチンパンジーの笑顔は何がちがう？」

和崎 春日 教授

国際人間学研究科 国際関係学専攻

「アフリカ地方バムン民族王権の都市儀礼

ーカメルーン国家・国際・資本のなかの資源なき民族の生き抜き戦略ー」

院生・学部生の来聴を歓迎します。

講演会「無形文化遺産と地域づくり」を開催



2020年1月29日(水)に、中部大学国際人間学研究所主催、国際人間学研究所・国際関係学部・人文学部共催で、岩本渉客員教授による講演会「無形文化遺産と地域づくり」が開催された。現在、国際人間学研究所で「持続可能な観光」というテーマの下で、東濃地域の地芝居の調査研究などを含むプロジェクトを進めているため、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長や日本ESD学会理事評議員を務める岩本氏に、特に「無形文化遺産と地域の持続可能な開発」の関係に焦点を当ててご講演いただいた。



図1. 会場風景

講演ではまず、「持続可能な開発」(自分たちの子供や孫、あるいは顔を合わせることもない100年後の人たちに、より良い地球、より良い社会を引き渡すための世代間努力)と、「SDGsと文化の関係」に言及する宣言の導入部やターゲット4.7、11.4についての解説があった。

次いで、無形文化遺産についてのユネスコの立場として、有形文化遺産とは異なり

「真正性」は重視されず(ただし、変化させるのが誰かが問題)、また「顕著な普遍的価値」ではなく、当事者らにとって価値があるという相対的な価値判断を行うことが紹介された。ただし、当事者らにとってのその価値を国が認めて法的に保護していることが登録の条件となるという。



図2. 岩本渉氏

基本概念の解説の後には、豊富な事例を通して無形文化遺産が地域とどのような関わりがあるのかが語られた。例えば、ガムラン音楽やワヤン人形劇の保護に、識字教育、技術訓練、起業促進などを組み入れたインドネシアの取り組み、イモギリにおけるパティック工芸の復活を通じた地域の震災復興の取り組み、フィリピンのイフガオ族の歌「ハドハド」を「誇るべき生きた伝統」として教え、これを新しい世代に伝承するために新しい学校を各地に設立した事例などが取り上げられた。いずれも、無形文化遺産が地域の結束の要となる「誇り」として機能するよう、教育を通して文化遺産の保護とともに地域づくりを行なっている好例である。

続いて岩本氏が所長を務める「アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)」の活動紹介があった。IRCIは、主にユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」の方針に沿って、無形文化遺産の研究の充実を使命とする機関であり、2018年度からは、「無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する複合領域的研究：教育を題材として」と題するプロジェクトを実施しているという。これは、教育に対してどのように文化が貢献しているかの調査研究であり、無形文化遺産の教育は、後継者の育成にとどまらず、無形文化遺産を通して、普通の子ども、普通の人に自分たちのコミュニティーを知って自分たちのアイデンティティを考えさせる教育であるという認識に立脚するという。フィリピンやベトナムを対象とし

た研究が進行中で、近日中にその成果がセンターのWEB上で公表されるとのことである。

最後に、持続可能性に伴うべき「共生」(21世紀の教育及び学習を提言する「ドローール報告書」が提言する「教育に関する4本柱」のうち最も注目されるもの)の概念について、岩本氏独自の解釈が図3を使って展開された。まず、共生を空間軸で捉えて、阿倍仲麻呂が「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」と唐で月を見ながら、故郷を懐かしんで詠んだ歌を引き合いに、存在する空間は異なっても「精神的な共生」をはかることが可能であるとする。また、時間軸で捉えて、古今集の詠み人知らずの「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を引き合いに、同じ場所での時間を超えた「精神的な共生」をはかることも可能であるとする。

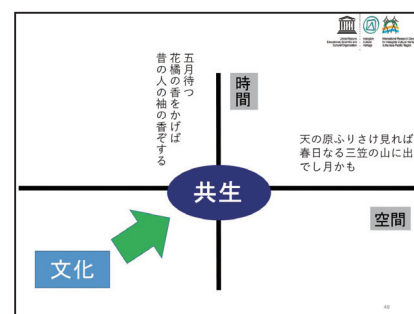


図3. 共生と文化(当日のスライドより)

教育で言えば、空間軸を通じた共生こそが global citizenship education と呼ばれるものであり、国境を超えてみんなが仲良くなっていくことが大事なのだという考えの教育となる。一方、時間軸を通じた共生は、まさにESDそのものであり、将来の人のことを考えて今努力することが大切であるという考えの教育の基となる。そして、岩本氏は、これを「文化」で考えるならば、文化遺産は時間を超えて継承されるものであり、空間が異なっても共感し、尊重し合えるべきものであるということになる、との言葉で講演を結んだ。

続く質疑応答では、高齢化社会での無形文化遺産保護のポイントについてや、どうやったら長良川の鵜飼を無形文化遺産に登録できるか、また、文化財の有形と無形の不可分性についてなどの質問があり、大変興味深い議論が交わされた。

(柳谷啓子)

The Smithsonian Cultural Rescue Initiative



Smithsonian Cultural Rescue Initiative Seminar

PM1:30-2:00 Reception

PM2:00-3:00 Seminar

- Ms. Elizabeth Kirby:
Protecting Cultural Heritage Under Threat: The Smithsonian Cultural Rescue Initiative
- Dr. Brian I. Daniels:
Studying Cultural Heritage Destruction during Conflict: The Work of the Conflict Culture Research Network
- Dr. Nana Kaneko:
Studying Intangible Cultural Heritage after a Disaster: A Case of Folk Performing Arts in Post-3.11 Japan

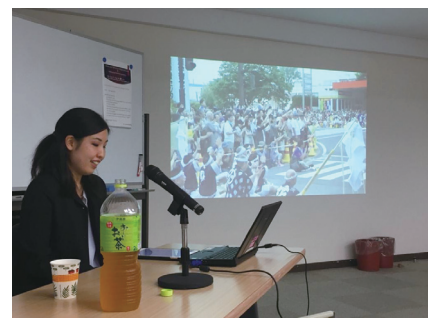
PM3:00-3:30 Discussion

主催：国際文化学研究所 協賛：国際文化学研究所 後援：国際文化学研究所

Protecting and preserving heritage threatened by natural disasters and human conflicts

The Smithsonian Cultural Rescue Initiative (SCRI), based at the Smithsonian Institution in Washington, DC, works to protect cultural heritage—including collections, sites, and traditions—from the impacts of natural disasters and human conflicts. SCRI projects include cultural rescue work in Haiti, Syria, Iraq, Egypt, Mali, Nepal, The Bahamas, and the U.S., as well as disaster training for heritage colleagues, first responders, and military personnel around the world. In September 2019, three members of SCRI visited the Graduate School of Humanities & Institute of Global Humanities to share SCRI’s research projects with students and faculty at Chubu University. Ms. Liz Kirby, Senior Advisor for Programs and Partnerships, provided an overview of SCRI’s activities and programming, highlighting SCRI’s work in the areas of recognition, resilience, and response. Recognition includes raising awareness to educate policymakers and the public about threats and ways to mitigate the associated risks. Resilience encompasses SCRI’s training activities, which is building a diverse, global network of trained cultural heritage leaders who in turn contribute to their

country’s preparedness in preventing cultural damage and loss. SCRI’s response work is done in coordination with locals on-the-ground to help communities stabilize their cultural heritage following catastrophic accidents and to better prepare them for the next impending disaster. Dr. Brian Daniels, SCRI Researcher and Director of Research and Programs at the Penn Cultural Heritage Center, shared the research of the Conflict Culture Research Network (CCRN), which works to study cultural destruction as a form of civilian targeting during conflict; investigate the material remains of cultural destruction in order to understand everyday violence and survival; and undertake the systematic collection and analysis of data about cultural destruction, cultural protection, and post-conflict cultural interventions. Dr. Nana Kaneko, Mellon/ACLS Public Fellow and Program Manager for Cultural Disaster Analysis, presented her doctoral research on the role of musical activities in recovery efforts in Tohoku, Japan following the 3.11 triple disaster. Matsuri festivals and folk performing arts were documented as one of the earliest musical activities to reemerge in coastal areas of Tohoku following 3.11 because of their deep-rooted history and regional distinctions. These activities helped people to reaffirm their identification and gave dispersed communities a reason to regularly reconvene and maintain community ties. At SCRI, Dr. Kaneko is working to raise awareness about the safeguarding of intangible cultural heritage from the threats of disasters and conflicts. She is directing a group of interns who are analyzing cultural reactions to disasters by aggregating and interpreting case studies from journal articles that demonstrate the use of cultural practices as recovery mechanisms from the impacts of disasters, broadly defined.



中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻からなる国際人間学研究科は、人文系諸科学と社会系諸科学に架橋をかけて、人間と文化、民族と国家の研究のフロンティアを拡大し、グローバルな諸問題に挑戦できる知的創造的研究、および、さまざまな現場から広く社会貢献を目指した実践的研究ができる人間を育成し、研究成果を通して社会に貢献することを教育研究上の目的としています。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/国際公共政策特論/発展途上国論/社会開発特論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/地域社会文化研究特論

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系/文化相関の科学哲学/海外文献研究

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリティシズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系/文化相関の科学哲学

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系/文化相関の科学哲学

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：石井洋二郎
 - 発行日：2020年3月18日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/